

キリスト教の成立と思索の始まり

中世哲学というひとつの思索の流れを遡ると、キリスト教が成立したときになされはじめた思索に行き着く。そこで、その思索の始まりに注目しよう。

とはいえ、ここではイエスその人については扱わず、イエスの考えたこと、語りかけたこと、行ったことはブラックボックスとしておく——

イエスから何がはじまったことは確かだが、イエス自身のことは哲学の研究対象にはなりにくい。ポスト・イエスの時代についてはじめて、哲学的分析ができる。

というのも、ここでもっとも基本的な資料は『新約聖書』と呼ばれる文書群(27巻)である。哲学的分析の対象として扱うときには、これらは決して「ひとつの書物『新約聖書』」としてではなく、「後に当時の教会によって認められて正典として採用されるようになった27冊の文書群」として扱う。それらのひとつひとつは独立した書物であり、それぞれそれを書いた著者ないし著者グループの思想ないし信念が表明された書物である。たとえば福音書という部類に属する文書が4つあるが、それらはイエスの生涯と行動を語っているとはいえ、それらは決して「イエスの生涯や行動・思想」についての直接的資料ではなく、「イエスの生涯や行動・思想について、その書物の著者(たち)が主張(ないし理解)していること」についての直接的資料として扱うべきなのである¹。

1 初期キリスト教の思想的課題

イエスの弟子たち

活動中のイエスに従うことは具体的な行動 イエスがいなくなると、「イエスに従う」とはどういうことかをことばで表現しなければならなくなる。従う・信じる ことと 理解する・言い表す ことの問題がはじまる。

用語の問題

新しいことを言うにも、社会・文化のなかで既に使われてきた用語を使わざるを得ない。既成の用語に新しい意味を盛り込む 用語とともにその背景にある文化・思想が入り込む；緊張関係。

e.g. ユダヤ教の用語でイエスを「メシア=キリスト」と言い表す；その際に「メシア」についての既成の理解に限定・修正を加える。

e.g. グノーシス主義の用語を使って、自らの信じることを言い表そうとする グノーシス主義の枠組みのなかに、イエスを位置づける。。

正統と異端

様々な言い表し方の間で、やがて論争が起こることもある。論争

¹福音書の主張するところからイエスの歴史的実像がどのように推定できるか、あるいは全く推定はできないか、といったことについては、新約学の分野であれこれの方法論が立てられ、議論されているが、それはその分野の仕事であろう。哲学的アプローチにできるのは、それらの書の直接の著者(ら)の思想の分析でしかない。

に勝った側は自らを正統とし、相手を異端とする。キリスト教も初めはユダヤ教の異端だった。後からみて、正統な理論や教会組織の形成に功績あった人々が「教父」と呼ばれる。

イエスは何者か？

これが言い表すべきことの中心。

使徒行伝（使徒言行録）によると、差し当たって直弟子たちは「キリストだ」とし、また「神の僕」「神の聖者」などユダヤ教文化の中で培われた用語を使って、自らのイエス理解を言葉にしている。

この限りでは、イエスは人間のなかで指導的立場にあるものとして、神から特別に指名され、派遣された者と認められているとはいえ、あくまでも人間の側に位置づけられている²。

使徒行伝（使徒言行録）の著者の歴史理解によると、「イエスは神の子だ」と言い出したのはパウロ——イエス在世時からの弟子ではなく、後から加わった理論家——であって（Act9:20,13:23）、ペテロに代表される勢力ではない。

この点に関する使徒言行録の叙述は印象的。

サウロ（後のパウロ）はキリスト教徒を迫害する側にいたが、復活のキリストに天からの光のなかで出会うという体験をきっかけに回心する。そして直ちに「イエスのことを『この方こそ神の子だ』と主張しだすのである。この記述のあとにペテロの説教がでてくるが、そこでもペテロは「神の子」とは言っていない。

さて、以上のように使徒言行録のキリスト教思想史理解に、イエスを神の子と理解したのはパウロがはじめてであって、ペテロたちではない、

という点があったのだが、これに対して、「否、ペテロはパウロよりもずっと前からイエスを神の子と認めていた」としたい勢力があったことも認められる。

マタイ伝では、イエス在世当時にすでにペテロがそう言ったとされているし、ペテロの手紙とされる文書でも、ペテロに擬して著者は、自分（ペテロ）は昔からそう考えていたと述べている。これはひとつには「イエスは神の子」という理解がその頃のキリスト教勢力のなかで、確立してきたことを示し、かつその理解の主唱者という地位をペテロに帰して、ペテロ系の権威を高めたい立場があったことを示す³。

イエスを 神の子 と理解し、そう主張し出すと、では「父なる神とどういう関係なのか」、「イエスも神なら、神は唯一ではないということか」といった問題が出てき、三一論の成立に至る理論形成・闘争のもととなる。この過程ではより洗練された用語——微妙なところをきれいに言い表せる用語——が要求される。ギリシア哲学の伝統の中で培われた用語のネットワークを使い、さらに使いやすいように練りつつ理論形成する：これがやがてギリシア教父によって担われた作業。

こうした思索の始まりはパウロに確かに見出される。

ピリピ書には、キリストがこの世に生まれるに先立って神と等しい立場で存在していたこと（キリストの先在）が主張され、 神の子 であることの内容が

²cf. Act.8.37 にイエスを神の子とする言及があるが、これは後世の付加である。

³結局成

立した教団は、パウロの神学+ペテロの教会であったといわれる。ペテロの権威づけのためのさまざまな要素が見出される。ユダの裏切りもペテロを高めるための情報操作だった可能性がある。

充実していく過程をしめす(ロマ書冒頭も同様の思想を示していると解釈できる)。

パウロとペテロの話をする以上は、
ここでヨハネについても検討しなければならないが、ここでは略。